

ニュウやノビタキなどもこの湿原がお気に入りである。

この湿原では、ヨシ群落とマコモ群落が大きな面積を占め、オオヨシキリ・コヨシキリ・エゾセンニュウなどの繁殖地になっている。日中はあまり目立たないが、日暮れとともにカエルの歌に負けないさえずりが一晩中続けられる。

「湿原は国際空港」に例えられる。ヤツガシラ・コミミズク・シギ科・チドリ科などの旅鳥は天敵の少ないこの湿原で短時日羽を休める。養分や水分を補給し体力をつけて、新たな旅に飛び立つ。

ヨコスト湿原は白老町の東側に位置し、面積 33 ha の低層湿原である。かつてはポロト湖の水が流入し、昭和中頃までは水位も安定していたが、近年、流入する川が途切れ、乾燥化が進行している。春の雪解け水や大雨の溜まり水が保水され、なんとか湿原の面目を保っている。

「ヨコスト」はアイヌ語で「獲物の多いところ」という意味である。昔はたくさんの魚やエビがいて、地元の古老から「魚は買うものじゃない」という話も聞かされた。その名残りと思われる不思議な光景が見られる。大きな鯉の群れが、大雨の後に産卵のためにどこからかやってきて、水が引く頃、どこかへ消える。今は人が魚獲りをすることもなくなったが、冬期、アオサギやダイサギが二桁の数になって群れを作り、凍てつく湿地で採餌している。彼らの胃袋を満たす魚介類があるのだろうか。

夏もガスや山背のために気温が上がりず、年中潮風が運ぶ塩分を浴びる過酷な環境だが、そのなかで生き続ける生き物たちの健気さが人々を魅了する。

2015 年、「ヨコスト湿原友の会」が結成された。翌年、環境省の「日本の重要湿地 500」に認定され、ヨコスト湿原保全の活動に弾みがついている。

ヨコスト湿原

中野 嘉陽
(白老町)

ヨコストの春はヒバリが運んでくる。3月下旬残雪がまだあり、ときおり吹雪に見舞われる海岸草原で、旅の疲れもそこそこに高い空からさえずりを響かせる。最近、越冬している個体も少数いることが確認された。農耕地や草原などヒバリの営巣場所は広範囲だが、ここでは砂丘のハマナス群落がよく利用される。ハマナスの鋭い棘が外敵の侵入を防ぐのだろう。

オオジュリンは4月上旬に渡来する。オスは頭部と顔が黒く、特徴があってわかりやすい。草原やヨシ原で繁殖しているが、なかでもセリ科の植物と相性がよい。オスは枯れたエゾノヨロイグサ・エゾニュウなど丈の高いセリ科植物に止まり、あたりの様子に気を配りながらさえずる。夏にはセリ科に集まる昆虫が主な食料になっているようだ。営巣中、高い見張り所を必要とするシマセン



シマセンニュウ 撮影：菅原弘行 2007年6月



オオハクアチョウとカワアイサ
撮影：菅原弘行 2013年3月